
幼馴染みには、ご用心？

春蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染みには、ご用心？

【Nコード】

N1442B

【作者名】

春蘭

【あらすじ】

寝てる彼にキスしてから、避けられる日々。もしかしてキスした事がバレてしまった？ねえ、君は私の事、嫌いになった…？

出来心で私は、寝ている幼馴染みにキスしてしまいました。

幼馴染みには、ご用心？

「ねえ、今日一緒に帰…」

「あ、俺、今日用事あるから…。先帰ってて！」

「あつ、ちよつと！」

言うだけ言つて、彼は去って行つた。私が彼にキスした日から、特に何も進展ナシ。それどころか、避けられてる感じすらする。

（まさかバレた？でも確かに眠ってたのに…。も、もしかして誰かに見られてたとか！）

冷や汗をかくのが分かつた。一度考えるとぐるぐる脳内を回り、ネガティブな方向へと向かう。今頃になって後悔してきた。

「嫌われちゃった…？」

問いかけた言葉に答えは無く、結局その日私は独りで帰った。

*

「早く出て来ないかな…。」

私は、隣の彼の家の前で待っていた。彼と一緒に登校するために。

（避けてる理由聞かなきゃ…。あ、その前に謝った方がいいのかな？でもまだキスが原因が分からないし…。）

昨日と同様、悶々と悩む。こんな私でよくキス出来たと思う。自分に拍手したい。

何故、一線を越えてしまった？

今までの幼馴染みの位置も切なかったけれど、避けられてる今に比べれば、側にいられるだけで幸せだった。
なのに、なぜ――。

（好き、だから…？）

無防備な寝顔に誘われ

もどかしさを引きずり

幼馴染みから離れたくて

気持ちを抑えられず

ただ感情のままに手を伸ばした

（どうであれ、最低だ…。）

キスしてる時はあんなにノリノリで、満たされてたのに。今は後悔と罪悪感しかない。我ながら呆れる。

「なんで、バレたんだろ…。」

ガチャ、

ドアが開く音がして、振り返る。眠そうな彼と、目が合った。

「あ、あのさ…！」

「ごめんツツ…！」

理解不能な謝罪を叫び、ダッシュで私を通り過ぎる君。

「待つて…！」

離れてしまう前に、私は彼の腕を掴んだ。君はビクツと反応する。

「なんで、避けるの…？」

発する言葉が、震える。鼓動がやけに早くなり、体が熱い。彼の答えに大きな脅えと、小さな期待が混じる。

「――俺、」

やだ……！

「ごめんー！」

「えっ？」

気が付けば私は謝っていた。

「ね、寝込みを狙うなんて最低だよね！勝手にキスしてごめん！ア
ンタの気持ち無視して……！」

違う、こんな事が言いたいんじゃない。私が、私が言いたいの――

「本当に、ごめん！私なんでも謝罪するから……」

「ちよっ、オイ」

「お願いだから、避けないで……。嫌いにならないで……！」

最後のほうは、悲鳴に近かった。涙が瞳に溜って、『情けないな』
とか、『恥ずかしいな』とか、あと『朝から近所迷惑かも』とかも、
頭の隅で思ってた。

「好きになってくれなくていいから……。」

こんなの告白してると同じだ。しかも、言ってる事めっちゃめっちゃだ

し…。

「……………」

嫌な沈黙が流れる。私は自分が哀れに思えて、うつ向きっぱなし。君の顔が、怖くて見れない。

「—本当に、なんでも謝罪する？」

「え…。」

（やっぱり、怒ってる？）

ズシリ、心に重いものが沈む。心臓の音が煩くて、息苦しい。

「じゃあ……………」

「！」

彼の手が、私の頬に触れた。ビクリと体が震える。思わず目を強くつぶった。

（叩かれる——！？）

ちゅっ

（——え？）

待っていた衝撃は来ず、変わりにきたのは、唇に柔らかい感触。

「……………」

「……………」

「……ええっ!?!」

「遅ッッ!?!」

私は信じられないと、口をぽかんと開ける。彼はバツの悪そうな顔をして、目をそらした。

（え、ちょっと待って。今のって、もしかして、いやもしかなくても……）

状況を理解した途端、カツ、と顔に、いや体全てに熱が集まる。

「な、なんで赤くなるんだよ!お前だって俺に散々キスしたくせに!」

「誤解される様な言い回しするな!!そういうアンタだって、真っ赤じゃない!?!」

「こ、これは暑いせいだ!?!」

「コート着てマフラーつけた完全防寒した奴が言っセリフかつ!」

「そ、それは……!?!」

「何よ……。」

お互い赤面して睨みあ、…見つめ合う。しばらくそうしていたが、不意に彼がため息をついた。

「お前つて、激にぶ…。」

君は呆れた様に、微笑む。その表情につい、ドキッとしてしまった。

「嫌いになんか、なるわけ無いだろ。」

「—なんで？」

「……はあ。」

またため息をつく彼。2回目はさすがに腹が立つ。何が言いたいの？と、目で聞いた。

「俺は、好きでもない女にキ、キスなんかしない!」

「……。」

「……。」

「……ええっ!？」

「だから遅いつて!」

（だって、それは、つまり……？）

体がみるみるうちに熱くなっていく。心拍数が早過ぎて、死んでしまっんじゃないかとさえ思った。

「お前は？なんで俺にキスした？」

「ッ！！」

彼がうつ向いた私を覗きこんでくる。死ぬ程恥ずかしいけど、目がそらせない。

（急に真剣な顔しないでよ）

（分かっているくせに）

（やっぱバレてた？）

（いつから起きてたのさ）

言いたい事はいっぱいあるけど、今言わなきゃいけない言葉は……

……

「——私は、」

ねえ私たち

幼馴染み卒業して、いいかな？

（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。これは、短編『居眠りには、ご用心？』の続きみたいになってます。単品でも読めますが、そちらも読んで頂くとより話が分かりやすいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1442b/>

幼馴染みには、ご用心？

2010年10月11日13時34分発行